誰もが安心して過ごすことのできる園・所にするために

～保育でのエピソードをもとにして～

今年度の人権保育プロジェクトは、「誰もが安心して過ごすことのできる園・所にするために～保育でのエピソードをもとにして～」をテーマとしました。プロジェクト会議では、気になる子ども・保護者の姿、保育でのエピソード等を出し合いながら、日ごろの保育実践をふり返っていきました。そして、子ども、保護者、保育者等、保育にかかわるすべての人が安心して過ごせる園・所にするために大切にしたいことについて考え合いました。

このパンフレットには、プロジェクトメンバーの経験をもとに作成したエピソードを4本掲載しています。そして、各エピソードには、経験年数の異なる保育者が話し合う「研修会でのやりとり」が続きます。みなさんには、研修会に参加したつもりで、自分ならどのような発言をするのだろう、どの発言に共感できるか等について考えながら読み進めていただけると幸いです。職場研修等でも、ぜひご活用ください。

（プロジェクトの様子）

テーマについて考えよう

保育のエピソードを出し合おう

研修会でのやりとりを考えよう

イラストを完成させよう

ふり返りを書こう

≪エピソード1≫ りえ先生

【ミユさんについて】

ミユさんは、3月生まれの1歳6カ月で、環境の変化に強く不安を感じ、保育者に泣いて抱っこを求めることが多い。成長がゆっくりであるため、つかまり立ちはできるが、伝い歩きをする姿はまだ見られない。家庭ではハイハイをしているとのことだが、保育園では行きたい場所やしたい事を泣いて訴えるだけで、保育者を後追いすることもなく、その場に座った状態のままである。移動は抱っこや体を支えるなどの支援が必要で、自発的な動きがほとんど出てきていない。あまり遊びが続かずに、保育者を求めてすぐに泣き出してしまうこともある。

母には、園でのミユさんの姿を伝えたり、家庭での様子を聞いたりするが、ミユさんの成長について悩んだり困ったりしている様子はなく、いつも明るく受け止めている。

エピソード

ある日、いつものように保育者の隣に座っていたミユさんが、突然ハイハイをして、カイトさんのところに移動しはじめた。ミユさんは、カイトさんの顔を覗き込みにっこりと笑いかけた。カイトさんが移動すると、ミユさんも後を追い、積極的にかかわる姿がみられた。その日から、何度もカイトさんのところへ向かう姿がみられるようになった。初めて友だちに興味を持つことができたことをうれしく感じた。

しかし、カイトさんに興味を持ったミユさんは、何度もカイトさんの顔に触れたり、何度も指で目を突くようなしぐさをしたりするため、保育者が「おめめが痛いから、だめだよ」と声をかけ、子どもどうしのかかわりを止めることがあった。保育室では、16人が一緒に生活しているが、その後も、カイトさんとだけ、かかわりを持とうする姿があった。カイトさんに対してうれしそうに体に触れたり、服を引っ張ったりするミユさんだったが、カイトさんは怒ったりつき飛ばしたりすることもなく、嫌な時にはその場を離れていくだけであった。

研修会でのやりとり

りえ先生

私は、入園当初からミユさんのことが気になっていました。いつも園では、不安な表情をしていて、自分から動こうとはしませんでした。発育の面でも、少し気になることがあって…。ミユさんが自分からカイトさんのところに行ったときは、ほんとうれしかったです。ミユさんがカイトさんを見る表情も、穏やかで笑顔でした。でも、カイトさんの顔に何度も触れて、目に当たったらと心配で…。

ちひろ先生

ミユさんは、なぜカイトさんに興味を持つのかな？16人いる仲間のなかで、ミユさんが気になる子はカイトさん。ミユさんとカイトさんの保護者どうしのかかわりもないみたいだけど…。

さとみ先生

子どもどうしのなかで、気もちが落ち着く所がどこかにあるのかもしませんね。ミユさんの目線に立って、どの場面でそばにいくことが多いかを観察することで、ミユさんの気もちが分かるかもしれないですね。周りの環境に敏感な所があるミユさんにとっては、穏やかなカイトさんだからかかわりたくなる存在になったかも。安心して近寄れる存在がいるということは、ミユさんにとっていいことですね。私は、安心できる存在は、おとな（保育者）でも、子どもでもどちらもあっていいと思っています。

りえ先生

ミユさんの成長について、私自身は結構気になっています。迎えの時に、そのことをミユさんの母に話すのですが、悩んでいる様子もなくて、いつも「そうなんですね」で終わってしまって。本当にミユさんの成長のことを気にしていないのか、本当は気になっているけど、私には話せないと思っているのか分からないんです。これから、母親とどうやってかかわっていったらいいか悩んでしまいます。

さとみ先生

気になる子どもや家庭の情報は園全体で共有して、いつでも相談できる窓口を開いておくことが大切だと思っています。一緒に成長を喜び合い、子どもの成長を第一に考えて、いいことも気になることも伝えることで、母と少しずつ信頼関係をつくって、子どものことに意識を持ってもらえるように働き掛けていきたいですね。そのなかで、ミユさんの成長のことで心配なことがあれば、園長先生や関係機関とも相談して考えていくことも大切ですね。

ちひろ先生

私は、カイトさんが感情を出さないことも気になります。ミユさんは友だちに興味をもち、かかわろうとしているけど、カイトさんはミユさんがしてくることに対して、泣くわけでもなく、たたくわけでもなく、その場から離れていくだけなんですよね。カイトさんへのアプローチも必要だと思います。あと、私が昨年に担任したクラスのなかにも、友だちの目に興味をもって、いつもさわりに行く子どもがいたんです。けがをさせてしまったらだめだと必死で、「〇〇さん、危ないからだめ！」って、何度も対応していた記憶があります。それでも、その子はなかなか止めなくて…。

なるき先生

保育をするなかで、子どもの安全を確保することは大切ですね。でも、一方で、「だめ、だめ」と言うのは、子どもたちのかかわりを切ってしまうことにつながってしまいます。子どもどうしの様子を見守り、心地よいかかわり方を、その都度、ミユさんにもカイトさんにも伝えていくことも大切だと思います。

私たち保育者の意識や姿勢が、その子だけではなく、周囲の子にも影響してしまうこともよくあります。実は、私が保育者になりたてのころに、いつも周りの子に手を出してしまう子がいたんです。私が、「危ないからだめ！」とばかり言っていたら、その子のことを、周りの子どもも「危ない子」「だめな子」と思うようになって…。その子を避けるようになってしまったんです。今思うと、その子がなぜそのようなことをするのかを丁寧につかみ、そのことを周りの子たちと一緒に考えていくべきだったと思っています。日々の遊びのなかで、子どもたちの思いや願いをつなぎながら、安心して過ごすことができる環境をつくっていくことが、私たちの役割だと考えています。

≪エピソード2≫ まなと先生

【アカネさんについて】

アカネさんは、5歳児で、日ごろから相手の気もちをくみとったり、周囲の状況を理解したりすることが苦手である。友だちとの気もちの行きちがいから、トラブルになることも多い。一方で、誰とでも分け隔てなく友だちにかかわり、困っている子に対して優しく接したり、手助けしたりする姿もある。園生活では、加配の先生がついていることが多い。

エピソード

ケンタさんが友だち2人と「製作」をしていた。その後、出来上がった製作物を使って遊んでいた際、近くにいたアカネさんがケンタさんの制作物を笑いながら急に取り上げた。ケンタさんは「やめてよ」と取り返そうとするが、アカネさんは「やったー」と声を上げ、笑ったまま返そうとしない。ケンタさんが何度も訴えるものの、それでもアカネさんは返そうとしなかった。一緒に遊んでいた友だちや、その様子を見ていた周りの友だちも「ケンタさんがつくったものだから、返してあげてよ」、「アカネさんも自分のもの、取られたらいややと思うやろ」とアカネさんに迫った。

その様子を見守っていた保育者は、タイミングを見ながら声をかけた。その後、クラスに置いてある「表情カード」を使って、お互いの気もちを伝えあってほしいと思い、今の気もちに合うカードをもってくるように声をかけた。ケンタさんが持ってきたカードは「泣いているカード」、アカネさんが持ってきたカードは「楽しく笑うカード」であった。

お迎えのときに、その日あったことをアカネさんの母に伝えると、母は「どうしたら、アカネは相手の気もちがわかるようになるのか」と戸惑う一方で、「最近、家で私に、ケンタさんのことを楽しそうに話をしてくれるんです」とも話していた。

（2人が持ってきたカード）

研修会でのやりとり

まなと先生

遊びのなかで、自分の気もちがうまく伝えられず、友だちとトラブルになることがあります。そんなときは、子どもたちの「気もちの表現」を豊かにしていきたいと思い「表情カード」を使っています。子どもたちには、この取組を通して、「自分の感情とまわりの人の感情はちがうこと」、「伝えあわないとおたがいの気もちはわかりあえないこと」を伝えたいって思っています。この場面でも、「今の自分の気もちのカードを持ってきて」と声をかけました。正直、アカネさんが「楽しく笑うカード」を持ってきたことに驚きましたが、私は、アカネさんを責めるのではなく、気もちを受け止めながら、ケンタさんの悲しい気もちも伝えていきました。

普段、加配の先生は、アカネさんにどのようなかかわり方をしているんでしょうか。また、トラブルがあったときの保育者の子どもたちへのかかわり方って、とても大切ですよね。どのように声をかけたらいいのか、私もよく迷います。今回のトラブルでは、ケンタさんが嫌な気もちをしているから、アカネさんは「ごめんなさい」と言えれば良かったですよね。

加配の先生は、とにかく一所懸命な先生で、アカネさんのためにいろいろと考えてくれます。アカネさんが落ちつかないときは、好きな玩具を持ってきたり、落ち着くスペースをつくってくれたりもしてくれます。でも、そのためか、アカネさんと2人だけの世界ができているように感じます。

そうなんですね。加配の先生の気もち、すごくわかります。以前、私も加配担当だったことがありました。そのとき、ユウキさんという子を担当していて、ユウキさんのために何かしなければと必死だったのを覚えています。ユウキさんがトラブルなく過ごせるように、そばにいるようにしていたんです。ある日、ユウキさんがある子とけんかをはじめました。すると、周りの子たちが私のところにやってきて、「ユウキの先生、ユウキさんにけんかをやめさせて。ユウキさんを怒って」と言ってきました。私はそのときハッとしました。私のことを「ユウキの先生」と呼んだんです。ユウキさんのためと思うばかりに私だけがユウキさんとかかわり、子どもどうしのかかわりを増やそうとしていませんでした。子どもの姿から自分の保育をふり返ることができました。

私も、自分の気もちをうまく伝えられなかったり、相手の気もちがわからなかったり、「気もち」そのものに気づいていなかったりする多くの子どもたちに出会ってきました。子どもたちは、育ってきた環境も経験もちがいます。このときはこういう気もちになるはずだ、もう5歳児だからこんな気もちをもつべきだなど、私たちに勝手な思い込みがあると、子どもたちの本当の気もちを知ることはできないですよね。普段から、子どもの目線で様子を見たり、対話をしたりすることで、その子の思いをつかんでいきたいと改めて思いました。

子どもたちに話をするとき、こちらの一方的な思いだけを伝えるのではなくて、一人ひとりの子どものいろんな思いや状況を、丁寧に感じとりながら進めていくことって大切ですよね。

家でいつもケンタさんの話題が出ることや持ってきたカードから考えると、アカネさんの本当の気もちは、大好きなケンタさんと遊びたかったのかもしれないですね。もちろん、アカネさんが「ごめんなさい」と言えるのがいいのかもしれないけど、そのことよりも、ケンタさんや周りの子たちが、アカネさんに対等な立場でかかわっていたことを大切にしていきたいですね。一緒に生活することでしか、おたがいの思いや気もちを知ることはできないと思っています。

最近、卒園した子どもたちが何人か園に遊びに来てくれたことがあって…。そのなかに、アカネさんのように相手の気もちをくみとるのが難しい子がいて、みんなで誘い合って園に来てくれたことが、とてもうれしかったです。「トラブルはよくあるけど、小学校の先生は、そのたびにみんなで話して解決してくれるよ」と卒園した子どもたちから聞いて、とても安心しました。

≪エピソード3≫ みなと先生

【カズキさんについて】

カズキさんは生後4か月で入園してきた。はじめは、父・母・兄と生活していたが、しばらくして父と離れて暮らすことになり、現在は、3人暮らしである。母は実家の仕事の手伝いをしており、朝早く保育園にカズキさんを預け、午後5時を過ぎるころに迎えに来る。普段は、母が送迎しているが、祖母が来るときもある。

入園したころは、飲み込む力が弱く、少しずつゲップを出しながらでないとミルクを飲めなかった。離乳食が始まるころになっても、食に対する関心を示さなかった。保育者は、そのような様子が気になり、お迎えのときに伝えようとするが、母は「忙しいので」とこたえると、カズキさんを抱え、立ち去った。連絡帳に園での様子を書いて知らせるが、家での様子を書いてくることはほとんどなかった。

エピソード

ある日の降園時に、今日こそは母親と離乳食の話をしたいと思い、母を呼び止めた。早口で「カズキさんの離乳食をペースト状のものから、歯茎でつぶせる硬さの物に変えていきたいと思っているんですが、おうちでは、どれくらいの堅さの物を食べているんですか」と聞いてみた。すると、母は「ベビーフードしか食べさせてないから、堅さとか言われてもわからない」と言った。

保護者の負担も考えて、「ご家庭での食事で、ベビーフードにプラスして、1つでもゆでた野菜を入れて噛む経験ができるようにしてほしい」と伝えたところ、母は「そんな時間ないし、面倒くさいわ」と言った。

次の日のお迎えのとき、具体的に離乳食にプラスしてほしい具材の大きさを見せたり、バナナぐらいの硬さだということを伝えたりするが、「ああ、わかった、わかった」と母は言う。その後、実行している様子は見られなかった。

研修会でのやりとり

園では、家庭での離乳食の進み具合に合わせて給食を提供することを大切にしています。カズキさんの場合は、発達と離乳食の進みにずれを感じたので、離乳食の段階をカズキさんの喫食状況に沿って、もう少し前に戻して提供しました。そうすることで、食べる意欲や咀嚼が促されたように感じました。でも、いちばん大切なのは、園と家庭とで協力しながら進めることだと思っていて、お母さんにいろいろ言ってみるんですが、カズキさんの育ちにあった離乳食を実行してもらえない状況です。

私も、初めて0歳児の担任をしたときに、離乳食の進め方が分からなかったんです。本を読んで勉強をしましたが、目の前の子どもにどうかかわっていけばいいか悩んでいました。そのときに園長先生から離乳食の進め方やそれに関連した他の発達が一連にまとまった表をもらい、少しヒントをもらった気がしました。

さとみ先生

離乳食だけではなく、他の発達のことも知ることで理解が深まったんですね。保護者によって、同じ説明でも伝わったり伝わらなかったりするので、実物を見せたり、連絡帳にイラストを添えたりするなど保護者に合わせた説明が大切ですよね。

私も自分の経験のなかで、わかってくれない、実行に移せない保護者に対して“園も頑張ってるのにどうしてやってくれないんだろう”と感じることがありました。今、ふり返ってみると会話も保護者へのお願い中心になっていたと思います。経験を重ねるなかで、保護者の気もちに寄り添うことが大切なんだと気づきました。“子どものために”と同じ方向を向いてかかわろうとすることで保護者との信頼関係を築いていくことができたと思います。

みなと先生

私も、さとみ先生の言われるように、カズキさんのお母さんに寄り添っているつもりなんですけど、上手くいかなくて…。

なるき先生

「そんな時間ないし、面倒くさいわ」という言葉の奥にあるお母さんの思いやくらし、生い立ちを知ることが大切なのではないかと思います。毎日のお迎えの時間に話もできますが、お迎えの時だけでは、言いにくいことを話したり、本音を話したりすることは、なかなか難しいと感じています。そんな時は、家庭訪問をして、お母さんとじっくり話してつながりたいなと思います。

みなと先生

具体的にどうやってお母さんとつながっていったのか、聞いてみたいです。

なるき先生

私が出会ったなかで、カズキさんに似た家庭環境の子がいました。その子のお母さんは「面倒くさい」が口癖で、子育てから逃げていると感じました。家に行き、話をしていくうちに、そのお母さんも厳しい家庭環境で育ってきたことがわかってきました。自分の親からもだれからも、子どもへのかかわり方やご飯の作り方を教えられてこなかったのです。私は何回も家に行って、いっぱい話をしました。「今日は一緒に味噌汁を作るで」と言って、豆腐とわかめを持って家に行ったこともありました。味噌汁さえ作れたら栄養をとれるからね。

そのお母さんは、弱みを見せたり、悩んだりしていることを相談できないなかで育ってきたから、子育ての悩みもひとりで抱えていたんですね。だから、まずは、「この人になら話せる」と思ってもらえるようにかかわっていました。

ちひろ先生

なるき先生は、なぜそこまでできるんですか。私なら、そこまで踏み込めずにあきらめてしまいそうになります。

なるき先生

子どものことを大切に思っていない親だと見ていた自分がいましたが、くらしを知っていくと、なぜ「面倒くさい」と言ってしまうのかがわかってきました。その背景も知らずに決めつけてしまっていた自分が見えてきました。抱えている思いやくらし、生い立ちを知ることで、私の保護者に対する見方やかかわりも変わっていきました。

みなと先生

くらしや生い立ちを知ることで、保護者のしんどさや、できない理由が見えてくるんですね。それを保育者が知ったうえで、かかわっていくことが大事なんですね。今度、家庭訪問をして、お母さんが子どもたちとどう過ごしているのかを知りたいと思います。

≪エピソード4≫ さくら先生

【マサトさんについて】

4歳児クラスのマサトさんはひとりっこで、母・祖父母・曾祖父母と生活している。母の仕事が早く終わる日には、降園時間も早く、マサトさんと過ごす時間を大切にしている。また、祖父母が玩具をたくさん買ったり、漫画やアニメを見て一緒に過ごしたりと、マサトさんと十分にかかわっている様子がうかがえる。一方で、おとなに囲まれた生活であるため、人と物を共有する経験が少ない。

園で、マサトさんはクラスの誰とでも遊び、クラス活動(製作・集団遊びなど)にも、意欲的に取り組んでいる。特に、ブロックで立体的なもの(車や飛行機など)をつくるのが得意で、「すごいのつくってるな」などと、まわりから言われることがある。

エピソード

ある日の自由遊びの時間に、マサトさんは、自分がつくりたい物をつくるために、ほぼすべてのブロックを使っていた。カナデさんが「もう少し使いたいから貸して」と言っても、マサトさんは聞こえないふりをして、1つも貸そうとしなかった。さらに、カナデさんが使っているブロックを黙って取った。すると、カナデさんが泣き出した。

その様子を見ていた保育者が「どうして、カナデさんが泣いてるかわかるかな。保育園のみんなが使うものだよ」と、肩を抱いて話をしたが、マサトさんは目をそらして遊び続け、話を聞こうとしなかった。保育者が、「お話をしているときは、顔を見てほしいな」と伝えたが、マサトさんは「はい、はい」と生返事をして、話を終わらせようとした。

研修会でのやりとり

さくら先生

普段の生活では、マサトさんは友だちと上手くかかわって遊んでいます。しかし、マサトさんは物の貸し借りになると、気もちの折り合いがつかないところがあり、私はどのようにかかわっていけばよいか悩んでいます。

さとみ先生

私がかかわってきた子どもたちのなかでもそんなことがよくありました。自分が遊びたいから友だちに貸せなかったり、友だちの使っているものを黙って持って行ったりする子がいたとき、保育者の判断で、理由も聞かずに声かけをしてしまうことがよくあります。マサトさんは、なぜブロックを貸せなかったのか、マサトさんと話してみると見えてくるものがあるかもしれませんね。

さくら先生

マサトさんは頑固で、友だちに「貸して」と言われれば言われるほど、意地を張っているように思います。毎日の遊びのなかで、同じような場面が何度もあるので、マサトさんに対して玩具を貸せない子というイメージが私のなかにあって、ついついマサトさんの気もちも聞かずに、「お友だちが泣いているよ。保育園のみんなが使うものだよ」と話すことが多いです。周りの子も、マサトさんに「ブロックを貸さない子」というイメージを持っているように思います。

さとみ先生

マサトさんは、意地を張ってブロックを貸さないだけなのでしょうか。保育者が子どもたちそれぞれの日々の様子を見ることは大切だけれど、だからと言って子どもに気もちや思いを聞かずに決めつけて判断してしまうことは危険なような気がします。「みんなが使うものだから、貸さないといけないよ」と言うのではなく、なぜ貸せないのかを聞くことが大切だと思います。もしかしたら、マサトさんがつくりたいものを完成させるには、友だちから「貸して」と言われたブロックが必要だったのかもしれないしね。

ちひろ先生

私のクラスにも、マサトさんと似た子がいます。クラスでは、トラブルがあったときだけでなく、行事のことを決めるときにもみんなで話し合いをするようにしました。全体でなくても、その場にいた子どもたちと一緒に考えるときもありました。最初のころは、相手の気もちをなかなか受け入れられませんでした。でも、くり返すなかで、自分の気もちを話したり、相手の思いに気づいたりする子どもが増えていきました。ときには、子どもたちだけでも話し合う場面もありました。

なるき先生

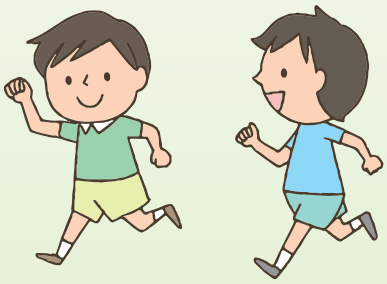
クラスで考える機会をつくることは大切ですね。困っている子がいたときに、ちひろ先生が大切にしている「子どもたちどうしで話し合う経験」を通して、子どもたちは、いろいろな問題を自分のこととして考えられるようになっていくと思います。

家庭の状況から見ると、マサトさんはおとなばかりに囲まれて生活しているので、同じくらいの年の子とのかかわり方がわからないのかもしれませんね。園での活動や遊びを通して、「人とかかわることって楽しい」と思える経験する時間をたくさん取っていきたいですね。そうすれば、マサトさんも友だちと一緒にものをつくったり、話したりすることの楽しさを感じ、「友だちと一緒なら、もっとすごいものがつくれるかも！」と、ブロックを一緒につかうことができるようになるのではないでしょうか。

さくら先生

確かに、家庭ではマサトさんの思いを優先していることが多いように感じます。私は、マサトさんの家庭での育ちに目を向けることができていませんでした。また、みなさんの話を聞いて、私自身「マサトさんはこんな子」と偏った見方をしていたことにも気づきました。家庭環境やいろいろな面を知ることで、一人ひとりの子どもの背景が見えてくるんですね。

また、園のなかで豊かなかかわりをたくさんつくることが、それぞれの思いや願いを知る機会となるんですね。これから、保育のなかで実践をしていきたいです。



心理的安全性とは

2022年度の人権保育プロジェクトは、「心理的安全性」をテーマに取り組みました。「心理的安全性」とは、恥ずかしさや恐れを感じることなく自然体の自分をさらけ出すことができる状態のことです。この「心理的安全性」は、Googleが社内の生産性の高いプロジェクトの特徴として見出しました。

こどもにとっても、保育者にとっても「心理的安全性」が確保された園・所であることが、保育の質を保障することにつながると考えました。また、自然体の自分をさらけ出すことのできる状態を意味する「心理的安全性」の状態をつくることは、人権的にみてもとても大切なことではないでしょうか。

ところで、2022年度から文科省の「幼保小の架け橋プログラム」が始まりました。幼保小の連携・接続については以前から様々な形で取り組まれています。このプログラムの考え方には、「架け橋期」として5歳から1年生の終わりまでとして接続の時期の幅を広げたこと等、以前の取組と比べいくつかのちがいがあります。具体的なこどもの姿を中心とした幼保小の対話が求められていることも、従来の連携・接続の取組とのちがいの一つです。

このリーフレットでは、【研修会でのやりとり】として具体的なこどもたちの姿を中心とした研修の姿についても考えてみました。「心理的安全性」が確保されている研修の場が、より生産性の高い研修の場であることは言うまでも有りません。今回の人権保育プロジェクトの取組が、より生産性の高い研修の取組のための一助となれば幸いです。

人権保育プロジェクト アドバイザー　鈴鹿大学短期大学部 学長　長澤　貴

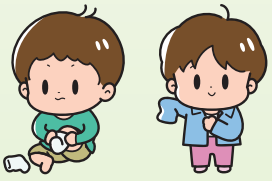
公益社団法人三重県人権教育研究協議会

https://www.sandokyo.jp

○2022年度のリーフレット等のデータは、
公益社団法人三重県人権教育研究協議会のホームページからダウンロードできます。

○リーフレットのバックナンバーは、公益社団法人三重県人権教育研究協議会のホームページからダウンロードできます。

▶2021年度 ／「子どもや保護者の思いを受け止められていますか ～自分の保育をふり返って～」
▶2020年度 ／「子どもを認め、寄り添う」とは
▶2019年度 ／「乳児期からの人権保育～２歳の生活から考える～」
▶2018年度 ／「乳児期からの人権保育～１歳の生活から考える～」
▶2017年度 ／「ともに育ち合う保育～保護者とともに～」
▶2016年度 ／「ともに育ち合う保育～『障がい児共生保育』の視点から考える～」
▶2015年度 ／「あそぼう！つながろう！～心をつなぎ合う意図的なふれあい活動をどのように展開するか～」
▶2014年度 ／「自尊感情を育むには… ②」
▶2013年度 ／「自尊感情を育むには…」
▶2012年度 ／「多文化共生から人権保育を考える④」
▶2011年度 ／「多文化共生から人権保育を考える③」
▶2010年度 ／「多文化共生から人権保育を考える②」
▶2009年度 ／「多文化共生から人権保育を考える①」
▶2008年度 ／「いじめ対応の根っこにあるものは？」
▶2007年度 ／「節分・雛祭りを人権保育の視点で考える（最終報告）」
▶2006年度 ／「節分・雛祭りを人権保育の視点で考える（中間報告）」



三重県人権保育推進支援事業　2023年3月 発行　三重県子ども・福祉部少子化対策課